

# 青梅市文化財ニュース

第428号

令和5年6月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館(青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859)

## ヤマガラ

ヤマガラはスズメ目シジュウカラ科の野鳥で、全長14 cmほどの大きさです。雌雄同色で青梅市では一年中見られる留鳥です。「ツツピー、ツツピー、ツツピー」とゆっくりとしたテンポでさえずります。また「ニーニー」「ツイツイ」などとはっきりした声を出します。

冬の食物を確保するため貯食行動という習性を持ち、秋に木の実を樹皮の割れ目や窪みなどに蓄えます。主にエゴノキ、アカマツ、スダジイ、イチイなどの実で、大好物はエゴノキの実です。9月下旬頃から盛んに貯食行動が見られます。

エゴノキの未熟な果実には高濃度のサポニンがあり、石鹼などまだなかった時代に、すり潰したエゴノキの実を水に混入させ、それを石鹼として利用していたそうです。このサポニンがえぐみの原因となっており、エゴノキの名称もこれに由来したものとなっています。かつては漁をするときにエゴノキの実を利用してサポニンの働きによって痺<sup>しび</sup>れて浮上してくる魚を獲る方法が用いられたこともありました。

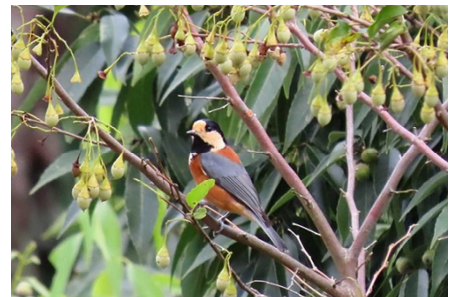
サポニンが含まれているのは外側の緑の部分で、ヤマガラはこの部分をきれいに剥ぎ取り種だけにして貯食します。学習能力も高いのでどこに貯食したかを覚えています。ときには土に埋めることがあります。どこに埋めたか忘れてしまい春になると土に埋められた種が芽吹くこともあります。

繁殖は4月頃から7月上旬で、樹洞やキツツキなどが開けた古巣に営巣します。コケを巣穴の下や回りに敷き詰め、産座には獣の毛、羽毛などを敷き暖かくします。3～8個の卵を産み、メスが卵を温め2週間ほどで孵化します。その後2週間ほど巣外で幼鳥にエサを与えます。

庭先に巣箱をかけると、シジュウカラが営巣することがあります。出入口の大きさを27 mmにするとシジュウカラ専用巣箱になります。出入口を40 mmにするとスズメや他の野



ヤマガラ



エゴノキの実

鳥が入る可能性が出てきます。昨年秋より出入口 40 mmの巣箱を設置してみたところ、冬にヤマガラが様子を見にやってきました。ヤマガラが春になると営巣するものと思っていましたが、巣材を運びこんだのはシジュウカラでした。数日で産座用の犬の毛を運び込みます。そろそろ産卵したかという頃、ヤマガラが巣箱をのぞき込み乗っ取りにかかりました。シジュウカラが盛んに警戒音を出します。驚いたことに「ジャージージャー」という「ヘビがきた！警戒しろ」という合図の声でした。その声に反応したメジロ、スズメ、ヒヨドリ、ウグイスなどが寄ってきます。普段行動を共にすることが多いメジロは一生懸命ヘビを探しています。この騒ぎは半日続きましたが、シジュウカラはあきらめ巣箱から離れました。乗っ取りに成功したヤマガラが新たな巣材を運び抱卵が始まります。数日後、無事幼鳥が<sup>かえ</sup>孵ったようでエサ運びが始まりました。

そろそろ巣立ちヒナが出てくる頃、一足先に近所で巣立ったヤマガラの子が人の手によって保護されました。「鳥かごに入れて様子をみたがもう2時間も親が来ない。保護してほしい。家には置いておけない。」と言うのです。本来巣立ちヒナはそのままいいのです。ぼんやりしていますが立派な巣立ちです。そのままにしておけば親がエサを持ってくるのです。どうやら親もあきらめて他に行ってしまったようです。もう死んでしまうのだったらと営巣中のヤマガラの子のそばにヒナを置いてみました。親鳥が帰ってきて見知らぬヒナに「ブーブー」と威嚇します。ヒナも巣箱から離れて草むらに隠れます。やはり無理かとそのままにして夜を迎えました。翌朝、生き延びたヒナが大きな声でエサをねだる声が聞こえます。すると昨日威嚇していた親鳥がエサを運び始めました。わが子として受け入れられたようです。どこで鳴いているのかと探してみるとバケツの中にいました。ここが安全と思ったようでした。



ヤマガラの子

その2日後、巣箱にいたヒナも巣立ちました。巣立つシジュウカラの卵が4つ巣材の中から出てきました。シジュウカラの卵を端に寄せて巣材で隠し、新たに産座を作っていました。あのシジュウカラの最大級の警戒音もこのためだったようです。



巣材から掘り出したシジュウカラの卵

(文責 荒井悦子)